

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2023 年

No. 144

2023年3月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 中山博邦
© JASE. 2023 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

内閣府の「若者の性被害調査報告」を見る…………… 1
いつきの“ヒューマン・ピーニング”^{②4}…………… 9
多様な性のゆくえ^{②1}…………… 10

今月のブックガイド…………… 11
JASEインフォメーション…………… 12

内閣府の「若者の性被害調査報告」を見る

元目白大学教授 内山 絢子

はじめに

令和4年初頭に実施された「若年層の性暴力被害の実態に関するオンラインアンケート及びヒアリング結果」が令和4年6月に公表された。これは、「第5次男女共同参画基本計画」(令和2年12月25日閣議決定)において、若年層を対象とした性暴力被害に関し、実態把握や取締等の強化、教育・啓発の強化、相談体制の充実、保護・自立支援の取組強化等の施策を総合的に推進することとされたこと、及び、「性犯罪・性暴力対策強化の方針」(令和2年6月11日性犯罪・性暴力対策強化のための関係府省会議決定)において、教育・啓発活動を通じた社会の意識改革と暴力予防を行い、大学生を含む若年層の性暴力被害の実態把握を実施することを踏まえたことによる。

これらの状況に鑑み、内閣府では若年者の性暴力の被害実態調査をオンライン調査で下記の通り2回にわたり実施し、また、ワンストップセンター等で聞き取り調査を行っているので、このアンケート調査結果を主に紹介し、若干の感想を述べることにする。なお、

調査を紹介するにあたり、原報告書が全体の調査結果と各被害類型別について記述しているが、被害類型相互の相違をわかりやすくするために調査内容について、類型比較する形をとった。

また、調査対象者の約8割が女性であることから、全体の結果は、女性の回答に偏るが、男女で差異がある内容もあるので、同時に報告されているデータ編の資料も参考にしながら紹介する。なお、本調査においては、従来の性別とは異なる「性自認」という表現を用いて男、女、Xジェンダー・ノンバイナリー(以降、ノンバイナリーと略称)、わからない・答えたくないの4件法としている。

ここでは男、女、ノンバイナリーの3分類について紹介する。なお、男・女に比べ、ノンバイナリーは回答者数が少ない。

調査手続き

調査全体としては、2回のオンラインアンケートとワンストップセンターなどでの面接聞き取り調査からなっている。

質問紙調査

○実施方法：オンライン アンケート

○対象：全国の16～24歳の（株）クロスマーケティング社「ネットリサーチ」の登録モニター

○配信方法：

①1次：性別・年齢別の人口分布を考慮して配信（被害遭遇率の算出を目的とする）

②2次：被害状況の実態把握の目的で、被害遭遇者の回収数を高めることを目的に追加配信

1次は22万件余、2次は10万件余配信し、回答率はそれぞれ、2.82%（6224人）、2.53%（2717人）であった。分析の対象者数は結果の表中に示してある。

調査で調べた性暴力被害の分類と例示

（ ）内は以下の文中で用いる略称

性暴力被害の分類	例示
言葉による性暴力（言葉）	言葉で性的な嫌がらせを受けた、体の特徴についてからかわれた、いやらしいことを言われた等
視覚による性暴力（視覚）	相手の裸や性器を見せられた等
身体接触を伴う性暴力（身体接触）	体を触られた、抱きつかれた、キスをされた、相手の体を触らせられた、服を脱がされた・脱がせられた、性器を押し付けられた、体液をかけられた等
性交を伴う性暴力（性交）	相手の身体の一部や異物を無理やり膣や口、肛門に挿入された、避妊なしに性交させられた等
情報ツールを用いた性暴力（情報ツール）	インターネット・携帯電話・スマホなどで性的に嫌な経験をした、見たくない画像や動画を見させられた、下着や裸を撮影された、下着姿や裸の写真を送るよう強要された、なりすました相手から性的な嫌がらせを受けた等

一次調査結果

1 一次調査（類型別被害の遭遇率）

対象者6224人中、何らかの性被害に遭ったことがある者は26.4%（約4人に1人）であった。最も多かった被害は言葉（17.8%）で、以下、身体接触（12.4%）、情報ツール（9.7%）、視覚（7.4%）、性交（4.1%）と続く。いずれの性自認においてもこの順序は変わらない。

年齢別では、いずれの性自認においても、16～19歳よりも、20～24歳のほうが被害遭遇率が若干高く

なる。また、順位は変わらないが被害遭遇割合は男女で大きく異なり、女性は男性のおおむね2～3倍となっている。特に、身体接触において差異が大きい。ノンバイナリーの者は、いずれの被害類型においても、被害遭遇率が高い（次ページ表1参照）。

また、下記に示す7つの手口の被害に遭遇したか否かを尋ねている。

7つの手口と例示

手口の分類	例示
AV出演強要	「モデル・アイドルになりませんか」と声を掛けられ、その後、聞いていない・同意していない性的な行為や、行為中の「写真」や「動画」の撮影をされた
JKビジネス	アルバイトへの応募をしたところ、約束していない性的な行為を要求された
レイプドラッグ	薬物などにより意識がない・もうろうとした状況で、性的行為をされた
酔わせて性的行為を強要	飲酒により意識がない・もうろうとした状況で、性的行為をされた
SNSを利用した性被害	インターネットやSNSなどで相手から性的な写真を送るよう要求された、画像をばらまくと言われた、なりすました相手から性的行為を強要されたなど
セクシュアルハラスメント	学校や職場で性的な嫌がらせをされた
痴漢	電車などで体を触られた、相手の体を押し付けられたなど

2 手口別被害の遭遇率

結果は次ページ表2に示す通りで、「痴漢」が最も多く（7.7%）、以下、「セクシュアルハラスメント」（6.4%）、「SNSを利用した性被害」（5.2%）が続く。

「酔わせて性的行為を強要」（2.2%）、「AV出演強要」（1.3%）、「JKビジネス」（1.2%）、「レイプドラッグ」（1.1%）は、1～2%である。おおむね、女性は男性より、また年齢の高い者は低い者より被害に遭う割合が高い傾向がみられるが、「SNSを利用した性被害」だけは、16～19歳の者の方が、20～24歳の者よりも被害遭遇率が高い。

本調査結果

本調査においては、遭遇した被害のうち最も深刻な被害とその時の状況、期待される施策について尋ねている。

表1 性自認別被害遭遇率（数字は実人員を100とした時の％、以下同様）

性自認	全 体			女			男			ノンバイナリー		
年齢	16～19	20～24	total	16～19	20～24	total	16～19	20～24	total	16～19	20～24	total
性交	2.2	5.0	4.1	2.7	5.7	4.7	0.5	2.7	2.1	7.5	16.0	12.2
身体接触	9.9	13.6	12.4	11.7	16.7	15.0	3.5	5.8	5.1	25.0	38.0	32.2
視覚	5.8	8.2	7.4	6.8	9.7	8.7	2.6	4.2	3.7	7.5	18.0	13.3
言葉	15.5	18.9	17.8	17.6	21.2	19.9	7.9	12.6	11.2	30.0	48.0	40.0
情報ツール	9.5	9.9	9.7	11.4	11.7	11.6	4.0	4.8	4.6	15.0	32.0	24.4
実人員（人）	2052	4172	6224	1422	2755	4177	547	1310	1857	40	50	90

表2 手口別被害遭遇率

性自認	全 体			女			男			ノンバイナリー		
年齢	16～19	20～24	total	16～19	20～24	total	16～19	20～24	total	16～19	20～24	total
AV出演強要	0.6	1.6	1.3	0.8	1.8	1.5	0.0	0.7	0.5	0.0	6.0	3.3
JKビジネス	0.5	1.6	1.2	0.6	1.7	1.3	0.4	1.0	0.8	0.0	6.0	3.3
レイプドラッグ	0.4	1.4	1.1	0.4	1.6	1.2	0.4	0.8	0.6	0.0	6.0	3.3
酔わせて性的行為を強要	0.8	2.9	2.2	1.0	3.4	2.6	0.4	1.5	1.1	0.0	8.0	4.4
SNSを利用した性被害	5.6	5.1	5.2	7.0	6.1	6.4	1.8	2.2	2.1	5.0	20.0	13.3
セクシュアルハラスメント	4.5	7.3	6.4	5.1	7.9	6.9	2.0	4.7	3.9	10.0	34.0	23.3
痴漢	6.1	8.5	7.7	7.9	11.5	10.3	1.1	1.7	1.5	10.0	22.0	16.7

1 最も深刻な被害

性自認・年齢別に最も深刻な被害の構成比を見た（次ページ表3）。いずれの性自認においても、「言葉」による被害が最も多く、以下、「身体接触」、「情報ツール」、「視覚」と続く。

順位は変わらないが、男女で差異が見られるのは、「言葉」「身体接触」の構成比で、最も深刻な被害が「言葉」であったとする者は、女性では3分の1程度であるのに対し、男性では過半数を占めている。また最も深刻な被害が「身体接触」であるとする者の割合は、女性では3割を占めるのに対し、男性では2割弱である。さらに、年齢別にみると、いずれの性自認においても、「情報ツール」以外では、いずれの被害経験も16～19歳に比べ、20～24歳のほうが高くなっているが、「情報ツール」では16～19歳のほうが高い割合となっている。「視覚」・「性交」を最も深刻だとする者は1割未満である。

2 被害の状況

（1）被害時の年齢

被害時の年齢は次ページ表4に示すとおりである。

全体でみると、高校生相当年齢が約3割と最も多く、次いで中学生時（24%）、小学生時（15.7%）、19～20歳時（14.8%）、21～24歳時（10.1%）と続く。

調査時直近の被害と過去の被害が半々である。被害類型により被害時期が異なり、「言葉」や「視覚」では中学生以下での被害が過半数となっている。「身体接触」や「性交」では16歳以降の被害が多くなる。また、「情報ツール」では約半数が16～18歳時の被害となっている。

（2）被害時の状況

被害遭遇時の状況を尋ねている。次ページ表5は、被害類型ごとに、回答割合の高い順に1位から5位までを示してある（以下〈 〉は表中の表記）。

被害にあったときの状況としては、「自分に行われていることがよくわからない状態だった」〈よくわからない〉（26.4%）が最多となっており、次いで「相手から不意をつかれ突然に襲いかかれた」〈不意に〉（18.4%）、「驚きや混乱、恐怖などで体が動かなかった」〈体が動かない〉（16.8%）、「電車内で逃れられなかった（痴漢）」〈逃げられない〉（14.2%）、「相手から、おどされた」〈おどされた〉（13.1%）、「相手から

表3 最も深刻な被害

性自認	女性			男性			ノンバイナリー			全体	
年齢	16～19	20～24	total	16～19	20～24	total	16～19	20～24	total	%	実人員
言葉	36.5	36.1	36.2	52.5	56.9	55.9	40.0	34.9	36.5	38.8	791
視覚	7.7	8.8	8.5	8.5	8.7	8.7	0.0	7.0	4.8	8.5	173
身体接触	27.8	30.8	30.0	16.9	17.4	17.3	40.0	23.3	28.6	28.2	576
性交	5.3	9.7	8.5	1.7	6.2	5.1	10.0	11.6	11.1	8.2	167
情報ツール	22.6	14.6	16.8	20.3	10.8	13.0	10.0	23.3	19.0	16.3	333
実人員	468	1218	1686	59	195	254	20	43	63	100	2040

表4 被害時の年齢

身分（年齢）	未就学	小学生	中学生	中学生以下の計	高校生	19～20歳	21～24歳
	0～6歳	7～12歳	13～15歳	0～15歳	16～18歳		
言葉	2.1	21.7	30.2	54.0	23.5	13.0	9.4
視覚	2.9	19.1	28.9	50.9	27.2	10.4	11.6
身体接触	3.6	13.7	20.3	37.6	35.9	15.8	10.6
性交	3.0	8.4	12.6	24.0	38.9	24.6	12.6
情報ツール	1.2	6.9	18.9	27.0	48.9	14.7	9.3
全体	2.5	15.7	24.0	42.2	32.7	14.8	10.1

表5 被害時の状況（上位5位）

類型 順位	言葉 (791)		視覚 (173)		身体接触 (576)		性交 (167)		情報ツール (333)		全体 (2040)	
1	よくわからない	23.9	よくわからない	39.3	不意に	34.7	不意に	38.3	ネットでおどされた	28.5	よくわからない	26.4
2	おどされた	16.2	体が動かない	17.9	よくわからない	28.8	だまされた	34.1	よくわからない	22.2	不意に	18.4
3	暴力	13.3	不意に	16.2	体が動かない	28.5	体が動かない	25.1	おどされた	14.7	体が動かない	16.8
4	拒否できない	12.3	逃げられない	11.6	逃げられない	25.5	よくわからない	25.1	だまされた	11.7	逃げられない	14.2
5	体が動かない	10.0	インターネット	9.8	だまされた	13.5	拒否できない	23.4	逃げられない	9.6	おどされた	13.1

『何もしない』『変なことはしない』『乱暴しない』などとだまされた』『だまされた』（12.1 %）となっている。

いずれの類型においても自分の身に生じていることがどのようなことなのかよくわからない、あるいは、不意に脅かされたり、だまされたり、拒否できない状況に追い込まれたりして被害に遭遇している様子が窺える。

特に、「性交」においては、いずれの項目も回答割合が高く、被害者の身に様々なことが同時に起きている様子が窺われる。

（3）加害者特性

①被害者と加害者との関係

被害者と加害者との関係についてみると、全体では、

〈学校関係者〉（36.0%）が最も多く、以下、〈知らない人〉（32.5%）、〈SNSで知り合った人〉（14.0%）、〈職場関係者〉（11.0%）、〈交際相手〉（8.3%）と続き、その他はいずれも3%未満である。

次ページの表6は被害類型別に1位から5位までを比較したものである。〈学校関係者〉はいずれの類型でも1位から3位にランクされる。また〈SNS〉は類型により割合に違いは見られるが、いずれでも5位以内に入っている。

被害類型により差異が見られ、「視覚」や「身体接触」では、〈知らない人〉の割合が最も多く過半数を占め、「性交」においては、親密な関係〈交際相手〉から知らない人まで幅広く分布している。

表6 加害者と被害者の関係（上位5位）

類型 順位 (実人員)	言葉 (791)		視覚 (173)		身体接触 (576)		性交 (167)		情報ツール (333)		全体 (2040)	
1	学校関係者	55.8	知らない人	59.5	知らない人	50.2	学校関係者	29.3	SNS	37.5	学校関係者	36.0
2	職場関係者	16.3	学校関係者	23.1	学校関係者	24.5	交際相手	27.5	知らない人	33.9	知らない人	32.5
3	知らない人	16.1	SNS	10.4	職場関係者	10.8	SNS	19.2	学校関係者	19.2	SNS	14.0
4	SNS	8.2	地域の人	6.9	SNS	7.8	知らない人	18.0	交際相手	12.3	職場関係者	11.0
5	交際相手	6.8	職場の客	4.0	職場の客	4.9	職場関係者	10.2	地域 / 職場の客	3.6	交際相手	8.3

②加害者の性別・社会的地位

加害者の性別・社会的地位は表7、表8に示すとおりである。性別でみると、〈異性〉(80.9%)が圧倒的に多く、〈同性〉(17.2%)は少ない。これは、対象者中女性が全体の75%を占めることが影響している。

類型により差異が見られ、「性交」、「身体接触」では〈異性〉が9割以上を占め、「言葉」や「情報ツール」では、〈異性〉は7割強である。社会的地位でみると、〈上位〉と〈同等・下位〉ほぼ同じ割合である。類型別にみると、「身体接触」と「性交」では〈上位〉が過半数を占め、「情報ツール」では〈不明〉の割合が多くなる。

しかしながら、男女別にみると大きく違いが見出される。女性被害者の約9割の加害者が〈異性〉である。

表7 加害者の性別・社会的地位（類型別、複数回答）

類型	加害者の性別			加害者の社会的地位		
	異性	同性	不明	上位	同等・下位	不明
言葉	74.1	31.1	6.2	43.6	50.0	13.8
視覚	86.7	11.6	5.8	32.4	43.7	25.4
身体接触	90.3	7.8	3.6	59.1	35.1	13.3
性交	94.0	3.0	4.2	51.5	36.1	22.7
情報ツール	71.5	10.5	21.3	34.9	39.2	33.5
全体	80.9	17.2	7.7	45.5	43.7	18.2

しかし、男性の場合には、〈異性〉は3分の1で、〈同性〉が6割を占める。特に若年（16～19歳）でこの傾向が顕著である。

社会的地位でみると、4割強ずつを〈上位〉と〈同等・下位〉で分けている。男女別にみると、女性では全体の傾向同様、〈不明〉の2割を除き、〈上位〉と〈同等・下位〉が約4割ずつとなるが、男性の場合、20～24歳では、〈上位〉と〈同等・下位〉がほぼ同じ割合である。しかし、若年男性（16～19歳）では、〈同等・下位〉が7割となっている。

(4) 被害場所

被害にあった場所としては、学校（22.5%）が最も多く、次いで公共交通機関（16.8%）、インターネット上・SNSアプリ上（11.9%）、自宅（10.3%）、加害者宅（8.7%）となっている。次ページの表9は被害類型別に、多い順に1位から5位までを示してある。

類型別にみると、「言葉」では〈学校〉（40.1%）、「視覚」（19.7%）・「身体接触」では〈公共交通機関〉（28.6%）、「性交」では〈加害者宅〉（32.9%）、「情報ツール」では〈ネット上〉（45.0%）が多い。

(5) 相談の有無・生活への影響・回復の程度

これらの被害について第三者に相談した者は約半数

表8 加害者の性別・社会的地位（被害者の性・年齢別、複数回答）

被害者の性・年齢		加害者の性別				加害者の社会的地位			
		実人員	異性	同性	不明	実人員	上位	同等・下位	不明
女	16～19歳	468	86.3	11.3	8.3	294	41.5	48.3	17.3
	20～24歳	1218	88.9	10.0	6.2	726	48.6	39.3	19.8
男	16～19歳	59	32.2	64.4	10.2	44	20.5	70.5	13.6
	20～24歳	195	36.9	57.9	13.3	154	46.1	49.4	11.0
ノンバイナリー	16～19歳	20	90.0	15.0	5.0	15	40.0	60.0	6.7
	20～24歳	43	76.7	25.6	4.7	36	47.2	30.6	25.0
全体		2003	81.3	17.0	7.4	1269	45.5	43.7	18.0

表9 被害場所（上位5位）

類型 (実人員) 順位	言葉 (791)		視覚 (173)		身体接触 (576)		性交 (167)		情報ツール (333)		全体 (2040)	
1	学校	40.1	公共交通機関	19.7	公共交通機関	28.6	加害者宅	32.9	ネット上	45.0	学校	22.5
2	公共交通機関	10.6	学校	13.9	学校	13.0	自宅	24.6	公共交通機関	13.8	公共交通機関	16.8
3	会社	10.1	公園	10.4	自宅	9.5	ホテル	21.0	自宅	9.6	ネット上	11.9
4	自宅	9.4	ネット上	9.2	加害者宅	7.8	加害者の車	9.6	学校	8.4	自宅	10.3
5	ネット上	7.3	施設	5.8	施設	5.7	学校 / トイレ	8.4	加害者宅	8.1	加害者宅	8.7

で、家族・親戚あるいは友人・知人が多く、公的な相談機関を頼る者は極めて少ない。比較的深刻であると思われる「性交」においては過半数の者は誰にも相談していない（表10）。

相談しない理由は、「恥ずかしくて誰にも言えない」〈恥ずかしい〉(36.0%)、「相談するほどのことではない」〈相談するほどではない〉(32.2%)、「相談してもムダだと思った」〈相談してもムダ〉(28.5%)、「誰にどこに相談してよいかわからなかった」〈わからない〉(25.7%)、「被害かどうかわからなかった」〈被害かどうか不明〉(17.5%)、「誰にも知られたくなかった」〈知られたくない〉(15.0%)、「そのことについて思い出したくなかった」(13.8%)、「自分さえガマンすればこのままやっていける」〈ガマン〉(12.7%)、「低年齢で相談することが思い浮かばなかった」(12.7%)、「自分にも悪いところがある」(10.1%)などが挙げられている。

被害遭遇により、どのような生活への影響があったかを尋ねている。影響がなかったのは、約3分の1であるが、類型により異なる（次ページ表11）。〈影響なし〉が最も少ない——重大な影響があったのが「性交」(15.0%)で、次いで「言葉」(30.8%)、「身体接触」(33.3%)、「情報ツール」(41.1%)、「視覚」(47.4

%)となる。この順序で生活への影響があったことになる。

影響の内容は、〈自分に自信がなくなった〉(21.3%)、〈夜、眠れなくなった〉(18.9%)、〈異性と会うのが怖くなった〉(17.8%)、〈誰のことも信じられなくなった〉(16.7%)、〈外出するのが怖くなった〉(14.1%)、〈生きているのが嫌になった・死にたくなった〉(11.2%)、〈人付き合いがうまくいかなかった〉(11.0%)等の回答が1割を超えている。「性交」では多くの項目を選択しているものが多くなっている。

また、4割弱の者は〈もとどおり回復した〉としているが、類型により差異が見られる。「視覚」では過半数の者が〈もとどおり回復〉しているが、「性交」では回復した者の割合は2割弱にとどまっている。なお、時間経過はある程度、回復に影響を及ぼすと考えられるが、未就学時の被害については、回復していないとする者が約4分の1を占める。幼い頃の被害が深刻な影響を与えていると推測される。

（6）多重被害

本調査（一次配信）において被害遭遇者1644名中1種類のみの被害遭遇者は約半数（48.3%）で、残る半数は複数の被害に遭遇している（2種類：25.6%、

表10 相談しない主な理由

順位 \ 類型 (実人員)	言葉 (791)		視覚 (173)		身体接触 (576)		性交 (167)		情報ツール (333)		全体 (2040)	
1	相談するほどではない	35.6	恥ずかしい	47.8	恥ずかしい	38.9	恥ずかしい	47.1	恥ずかしい	40.3	恥ずかしい	36.0
2	相談してもムダ	29.3	わからない	28.4	相談してもムダ	36.5	知られたくない	28.7	相談するほどではない	35.5	相談するほどではない	32.2
3	恥ずかしい	28.3	相談するほどではない	28.4	相談するほどではない	32.7	相談してもムダ	27.6	わからない	21.5	相談してもムダ	28.5
4	わからない	25.7	相談してもムダ	22.4	わからない	28.4	わからない	26.4	自分に非がある	21.0	わからない	25.7
5	被害かどうか不明	17.7	知られたくない	22.4	知られたくない	22.3	ガマン	21.8	相談してもムダ	20.4	被害かどうか不明	17.5
相談していない		52.2		38.7		36.6		52.1		55.9		47.3

表 11 生活への影響

被害後の影響	類型 (実人員)	言葉 (791)		視覚 (173)		身体接触 (576)		性交 (167)		情報ツール (333)		全体 (2040)	
	1	自信がない	34.0	眠れない	17.3	異性と会うのが怖い	22.7	異性と会うのが怖い	32.9	眠れない	18.3	自信がない	21.3
	2	誰も信じられない	20.0	異性と会うのが怖い	13.9	外出が怖い	17.2	誰も信じられない	32.3	番号・アカウントを変えた	16.5	眠れない	18.9
	3	眠れない	19.6	外出が怖い	13.3	その時の情景が蘇る	16.7	眠れない	29.9	誰も信じられない	13.2	異性と会うのが怖い	17.8
	4	人付き合いがうまくいかない	14.7	誰も信じられない	9.8	眠れない	15.5	自信がない	26.3	異性と会うのが怖い	12.9	誰も信じられない	16.7
	5	異性と会うのが怖い	14.0	自信がない	6.9	誰も信じられない	12.2	死にたい	25.1	自信がない	12.6	外出するのが怖くなった	14.1
	なし		30.8		47.4		33.3		15.0		41.1		33.3
	回復	していない		14.7		9.8		10.2		21.6		16.2	
もとどおり			37.2		51.4		37.8		19.2		42.3		37.9

3種類：14.3%、4種類：6.6%、5種類：5.0%）。

表 12 は、最も深刻な被害を挙げた者が、それ以外の被害に遭遇している割合を示してある。特に、「性交」を最も深刻な被害として挙げたものが、それ以外の被害にも遭遇している割合が極めて高い。

表 12 最も深刻な被害とその他の被害の重複割合

		最も深刻な被害				
		言葉	視覚	身体接触	性交	情報ツール
経験した被害	言葉	100.0	35.8	48.8	62.3	39.9
	視覚	14.3	100.0	22.2	49.7	20.4
	身体接触	21.0	21.4	100.0	74.3	23.1
	性交	7.5	9.2	10.6	100.0	9.9
	情報ツール	19.5	22.0	27.4	43.1	100.0

3 これからの対策として望むこと

被害遭遇時、その後に対策として望むことは、以下の通りとなる。

被害直後、現在ともに、事件の話を聞いてもらう（直後：36.3%、現在：20.3%、以下同様）、精神的な支え（25.8%、18.2%）、そっとしておいてもらう（17.0%、13.9%）、安全な場所の確保（16.1%、9.0%）、プライバシーへの配慮（14.0%、9.7%）等が多い。

4 自由記述

アンケートで回答できず、自由記述で記載された内容については以下のようにまとめられる。いずれも具体的で、被害の深刻さがうかがわれる。

1) 事件・出来事について

①幼いころの被害は何をされているのか理解できずそ

れが性被害であるとの認識がなく、後に（成長してから）それが性被害だと認識できた。

②被害直後、どこに相談できるかわからなかった。

③被害を訴えても、警察・学校・職場・相談機関等で適切な対応が受けられず不満が残った。

④今でもその出来事を思い出して辛い。

2) 今後への期待

①刑法改正、加害者への重罰化。

②保育園・幼稚園等早期における性教育の実施とそのための広報活動。

③相談しやすい環境の整備。

④性犯罪・性暴力についての認識の徹底及びそのための広報活動。

⑤被害者への偏見をなくす。

また、聞き取り調査からは、若年者の性被害がネット環境（スマホ・SNS等）を通して増加していること、被害者に障がい者、LGBT、外国人などが増加していること、また、男性被害者の相談も増えているが、対応できるスタッフが十分ではないこと等が示されている。

上記調査への個人的感想

2017年の刑法改正以降、女性以外の性被害者にも配慮がなされるようになってきている。本調査においても、女性だけではなく男性も性被害に遭遇しており、中には回復できない深刻なケースも含まれることが示されている。

本調査において、性自認に男性・女性ほか、Xジェンダー・ノンバイナリーの類型を設けたことは画期的

ではある。が、女性被害者以外の被害者の母数が少なく、統計的な安定性には課題を残している。とはいえ、男性被害者の問題が新たな課題であるならば、全体をまとめて、あるいは男女を込みにした類型別の分析だけでは十分とは言えない。

たとえ、該当数が少なくとも、性自認別類型別の分析結果が提供されるべきではなかったろうか。男女+ α で被害の実態に差異があるであろうことを考えれば、今後の対策等に関しても、自ずから対応や対策も異なってくると考えられる。また、数が十分である言葉や情報ツールの被害などは男女別の分析がなされ、男女で同じ影響があるのか否か分析されてもよかったのではないか。

実態が明らかにされた上で、提言がなされるならば、調査はより価値のあるものとなるのではなかろうか。例えば、男性の被害で多いのが言葉による被害である。男女とも、小学校高学年から中学生時においては二次性徴が出現する時期に相当し身体の変化が著しく、個人差も大きい時期である。この時期に、言葉による様々な「からかい」は多発していることがすでに報告されている。しかし、こうしたことなどが、性被害として深刻な影響を与えていることは十分理解されているとは言えない。こうした、些細ともとれる日常生活の出来事の中に、性被害が潜んでいるということが認識を新たにし、被害防止や再発防止につながっていくのではないか。

また、数的には十分ではない性交の場合、男性被害者数は少ないが、聞き取り調査による例から事例的に提示することもできよう。折角の統計調査が政策提言につながっていないのは残念である。

自由記述の中に、被害が幼少期であったため性被害と認識できなかったことが指摘されている。一部の人の認識では、性暴力は特別な場所で特殊な人だけが被害に遭うとの認識がいまだにあるかもしれない（強姦神話など）。あるいは、性暴力を狭義に捉え、極めて厳しい性交場面だけを想定する人がいるかもしれない。こうした性暴力の認識に関し、性被害は特別なことではなく、我々が生活する日常生活の空間——学校や職場や公共交通機関——の中で多発していることを知らしめる広報啓発が欠くべからざるものである。

特に、本調査においても、約半数は、中学生以下の被害であり、未就学児の被害も少なくない。低年齢児

の場合、被害に遭遇すれば何らかの行動異常が現れてくることがよくあるので、たとえ本人が発生した出来事について語ったり、あるいは、被害と認識できたりしないことがあっても、周囲の人々の注意深い観察で可視化することが可能であり、必要でもある。性被害調査の結果の公表は、こうした認識を改めるのに大いに役立つのではないか。

しかしながら、朝日新聞や毎日新聞に一部発表されたのを見ても、4人に1人が性被害、被害場所は学校と書かれるのみで、男性被害や言葉の被害には言及されていない。折角の調査が残念である。保育園・幼稚園からの早期の性教育が必要なこと、情報機器のツールから性被害に遭遇する危険性、LGBTを取り巻く様々な課題の問題も含めて警告を発してほしかったと思う。

なお、筆者が20年以上前に、高校生・大学生（男女）を対象とした被害調査の中では、身体接触（男性4.1%、女性60.7%）、公共交通機関等でのすり寄り（男性4.7%、女性48.8%）と高率で被害報告がなされていた。それに比べると、今回のオンライン調査の女性の被害経験の割合は低いように見える。被害の実態は、もう少し多いのかもしれない。性被害は、まだまだ被害の公表が憚られる被害のひとつであろう。決して被害者本人に非がなくても、公然と被害に遭ったとはいえない。また年齢の若い段階で被害に遭った時には被害と認識できない。早期の性教育の必要性、LGBTが抱える様々な問題など性教育の課題は山積みである。こうした課題を公表し、広報啓発活動とするのに、調査結果の公表はその良い機会であったのに十分生かされているとは言えなかったのが残念でもある。

【引用文献】

- (1) 若年層の性暴力被害の実態に関するオンラインアンケート及びヒアリング結果報告書
https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/r04_houkoku/01.pdf (2022年10月13日)
- (2) 若年層の性暴力被害の実態に関するオンラインアンケート結果（データ編）
https://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/r04_houkoku/03.pdf (2022年10月13日)
- (3) 内山絢子・及川里子・加門博子 高校生・大学生の性被害の経験 科学警察研究所報告防犯少年編 39-1 pp32-43, 1988

いつきの“ヒューマン・ビーイング”

人権について考える ②4 最終回

土肥いつき

京都の公立高校教員。24 時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

チョークを捨てて街に出よう

リビングライブラリについて話すと「どうやって人を集めたの？」と聞かれることがあります。そこで、今号にはリビングライブラリがなぜ可能となったのかを書くことにします。そのためには、まずはわたしの担任時代について書かなければなりません。

わたしはいつも学年でもっともヤンチャであったりもっとも低学力である生徒が集まるクラスを担当しました。そこでは「進路保障」以前に「進級保障」が必要でした。ところが、わたしは決して「力のある」教員ではありません。そのことを身にしみて感じたのは、はじめて3年生を担当した時にいたKという生徒の存在でした。Kは、いわゆる高校デビューをした子で、なにか指導をしようとしても、ふた言目には「ほっとけ！」としか言わない生徒でした。なにを言っても通じないので、わたしは「もうええわ。ほっておこう」と諦めてしまいました。そんなKだったので、当然卒業判定会議で卒業不可の判定が下りました。その夜、Kの家に行き卒業ができない旨をKに伝えたと、突然Kは泣き崩れ、「センセイ、なんでわたしを見捨てたん」と言いました。その瞬間、わたしがやったことは「ほっておいた」のではなく「見捨てた」んだとわかりました。それ以来、わたしは生徒を見捨てることだけはしないでおこうと思ったのです。

しかし、「力のない」わたしがひとりで生徒を抱えられるはずがありません。そのために、家庭訪問もこまめにおこない、部落の中の隣保館での学習会にも参加しました。そんなことを繰り返す中で、家庭や地域から少しずつ信頼を寄せられるようになりました。

ただ、信頼を寄せてくれたのはそうした人たちだけではありませんでした。実は、進級や卒業が危ぶまれる生徒のことをもっとも心配しているのは、その生徒の友人たちでした。そこで、教室に行って生徒と話し込むとともに、クラスの他のメンバーに「助けて」と言うようになりました。すると、クラスのメンバーの、時として荒っぽくもある支えのおかげで進級・卒業できる生徒があらわれるようになりました。

助けを求めたのはクラスのメンバーだけではありませんでした。例えば、かつてTという生徒を担当しました。Tの両親はTが小さいときに離婚しており、祖父と二人暮らしでした。祖父は心臓を患っており、日常生活を送るのがやっとという状況でした。したがって、Tの家には生活や勉強の面倒を見る人がいませんでした。そんなTを支えていたのは、中学からの友人で他校の生徒だったNでした。試験前に学習会に誘うために、Tの家に行ったことがありました。ところが勉強から逃げたいTは家にいませんでした。そこでわたしはNに「Tを探してほしい」と頼みました。すると間もなくNはTをつれて学習会に来てくれました。わたしはNを信頼していたし、NもTをなんとかしてでも卒業させたいと思うわたしを信頼してくれていたんだろーと思います。そんなNの存在のおかげで、Tは無事卒業しました。こうした経験を繰り返す中で、力のないわたしは「コーディネーター」になればいいということを学びました。

その後、わたしは担任という立場から人権教育担当という立場になりました。それとともに、わたしはチョークを置いて、学校や京都という縛りからも離れて、あちこちの集まりに参加するようになりました。すると、そこには学校の中では出会えない魅力的な人がたくさんいました。わたしはみなさんの面白い話を一生懸命聞き、質問し、さらに魅力を探しました。魅力を見つけたら、その魅力を誰かに伝えたいと思います。いつしかわたしは、魅力的な人々同士がつながる「場」をつくるコーディネーターになっていました。やがて、そんな人たちを生徒たちと出会わせたら、きっとうちの学校のしんどい生徒がエンパワーされると思うようになりました。そこで、みなさんに「助けて」と言いました。それに応えてくれた人たちによって「リビングライブラリ」が可能になりました。

「いつきの“ヒューマン・ビーイング”」は今号で終わります。お読みいただきありがとうございました。次号から、新たなテーマで連載を始めます。

多様な性の ゆくえ

One side/No side [71]

参加する人、しない人

テニスにはまったく詳しくないのだが、4大会のテレビ中継があると、そのときだけにわかファンに豹変する。1月の全豪オープンには選手の復帰と不在にも個人的な関心を持った。

2019年と2022年に優勝している大坂なおみ選手は妊娠を明らかにし、出場を辞退した。女子テニス協会(WTA)には「特別ランキング制度」により、妊娠、出産などの長期離脱から復帰する際には離脱前のランキングに基づいてシード権が与えられるなど産休制度も整えられているという。出産後に再び活躍することを期待したい。

一方、男子シングルスはノバク・ジョコビッチ選手が優勝し、10度目の全豪タイトルを獲得した。

去年は、新型コロナウイルスのワクチン接種を拒否したこと、オーストラリア政府がビザ発給を取り消し、入国が認められなかった。2年ぶりの大会は、左足の故障に苦しみ万全のコンディションではなかったというから驚く。

オーストラリア政府は、今年はワクチン接種の有無にかかわらず入国を認めている。優勝はもちろん素晴らしいが、個人的には実はそちらの方に関心があった。世界のトップ選手であっても、重要な大会への出場や優勝が、何ものをも超える価値とは限らない。一連の経緯は、そうしたことを改めて示しているようにも感じられるからだ。大切にすべき価値の是非は、個人の選択の問題もからみ、別の議論になってしまうのだが、とりあえず選択は様々であるということはある。

逆にオーストラリア側から見れば、昨年6月に政権交代があり、7月には渡航者に対するワクチン接種義務も廃止された。この1年の変化は大きい。世界の関心を集める巨大スポーツ大会が舞台になると、価値をめぐる議論も一筋縄ではいかないようだ。

今年の秋にはラグビーのワールドカップ2023がフランスで開かれる。コロナ流行の影響で予定が1年延び、昨年開催となったワールドカップ2021は女子の大会、今年は男子の大会になる。開幕戦は9月8日の

フランス対ニュージーランドで、優勝候補同士が早速、激突する。10月28日に予定されている決勝も、開幕戦と同じカードになるかもしれない。

2019年の日本大会は、日本代表が決勝トーナメントに進出する活躍で、大いに盛り上がった。コロナパンデミックが始まる前だったこともあって、開催期間のほぼ2カ月は、私のような最末端のファンにとっても夢のような日々だった。フランス大会でも日本代表の活躍に大いに期待したいところだが、それと同時に試合以外の話題にも注目する必要がある。

2019年の開催期間中は、性的少数者が安心して過ごせる場所としてプライドハウス東京2019が開設された。場所があることの重要性が認識され、その後もプライドハウス東京レガシーやプライドセンター大阪などが生まれている。

ラグビーの話に戻れば、フランス大会では各国代表の資格要件が大きく変わった点にも注目したい。

これまでは、一つの国(地域)の代表となった選手は他の国(地域)の代表に選出されることはできなかった。だが、新たな規則では「最初の代表チームで最後に試合出場してから36カ月以上経過している」「代表資格変更を希望する国で生まれているか親・祖父母の誰かがその国で生まれている」などの要件を満たしていれば、一度だけ代表資格変更が可能になったのだ。ニュージーランド、オーストラリアなどラグビー強国の代表を輩出してきたトンガ、フィジー、サモアなど太平洋諸国では、その選手たちが出身国に戻れるようになり、ラグビー界の勢力図も少し変わるかもしれない。

性的少数者に対する過激な投稿をツイッターとインスタグラムで行い、それを取り消そうとしなかったことから、2019年W杯の前にオーストラリア代表の地位を失ったイブラヘル・フォラウ選手もトンガ代表として今回のW杯に出場する道が開かれる。グラウンドでの活躍だけでなく、注目しておきたい選手の一人ではないかと個人的には思っている。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

「しらかば診療所」の実践記録

私は新宿二丁目でゲイバーを経営しているので、営業中、ゲイのお客さんなどから性感染症についての相談をされることがある。そんな時に必ず勧めるのが、「しらかば診療所」での検査や診察だ。新宿から近い立地というのもあるし、またここが性的マイノリティにとって受診しやすい医療機関であるからだ。

一般的にも性感染症というのは他人に言いづらい疾患だったりするわけだが、ましてやそれが同性愛者だったりすると、カミングアウトの困難さから病院に行く勇気が持てなかったり、あるいは病院にかかっても配慮のない医師の言葉に傷ついてしまったり…という問題も生じる。そうした状況に対処しようというのが、ここで実践されている「性的マイノリティ診療」だ。

日本で「性的マイノリティ診療」という試みが最初になされたのは、1988年に、エイズの感染拡大に危機感を抱いたゲイ活動家の東郷健氏が、医師で作家の永井明氏の協力を得て新宿に開設したクリニックだった（こちらは1997年に閉院）。その後、2007年、「性的マイノリティの立場に配慮し、性的マイノリティが安心して利用できる医療サービスを提供する」ことなどを理念に、LGBT当事者の医療者らが、米国の先行する医療機関（Ferway Health）を参考に立ち上げたのが「しらかば診療所」であった。

それではタイトルにあるように、性的マイノリティのための診療空間というのはどうあるべきなのか。編著者の井戸田一朗氏によれば、例えば、「問診票に性別欄を設けていないこと」。それは性自認などに違和感を持っている患者などへの配慮であり、また「個室で時間をかけて診療を行う」からこそ、そうしたきめの細かい対応ができるという。ゆえに、プライバシーにはそうとう気を配っていて、「待合室では患



性的マイノリティのための 診療空間のつくりかた

井戸田一朗編著
金芳堂
定価 3520 円（税込）

者さんの名前を呼ばない」ことや、防音なども工夫している。あるいは、来院者同士が鉢合わせしないように「予約制を導入することで、診察待ちの人数を抑える」。そして、これは他の医療機関ではなかなかないことだと思うが、希望があれば親族以外の「パートナーに同席してもらうことがある」。婚姻制度から排除されている同性カップルの立場や、感染リスクを考慮した対応だろう。

本書が有用なのは、感染症の説明などの冒頭に「ある日、診察室で」という項が置かれ、そこで実際に診察室で交わされた会話が個人情報に配慮しつつ再現されているところだ。

私（*医師）「Lさん、今日の結果も HIV は陰性でした。もしあったらの話だけれど、最後にコンドームのないアナルセックスをしたのはいつ？」

Lさん「実は、先週しちゃいました…また検査受けにきますよ。」

などというやり取りが実にフランクに、リアルに、また性的マイノリティの機微に触れるかたちでつまびらかにされていて、四角四面の医学書では伝わらない性的マイノリティの心持が読み手に伝わる。

本書は「しらかば診療所」で積み重ねられてきた実践が丸ごとテキスト化された医療書であり、主な読者を医療関係者に想定した専門書であるが、専門家だけの書籍にするのは勿体ない。たしかに、疾病について解説している項など専門性を持たない読者には理解するのは容易でないはずだが、先の、診察室での会話などの例は、性的マイノリティが医療へアクセスする敷居を低くするのに役立つし、所々に挟まれる4コマ漫画などには、それだけでエンタメ性すらある！

是非とも本書を学校の保健室、あるいはゲイバーなどにも置いてもらい、この診療所で得られた「経験」を共有してほしいと願う。

（作家 伏見憲明）

▶▶ **3月18日（土曜日）13:00～15:30 オンライン開催** ◀◀

北東北性教育研修セミナー2022 東北、PRIDEの歩む先

2022年、東北での性の多様性尊重に向けたプライドパレード／マーチがとうとう東北6県 全ての場所で開催された。各地での歩みはこれからどこに向かおうとしているのか。各団体から、これまでのパレード／マーチの歩みや今後の展望・予定などについてお話いただきます。

【参加団体】 青森レインボーパレード、Akita Pride March、岩手レインボーマーチ、ふくしまレインボーマーチ、みやぎにじいろマーチ、やまがたカラフルパレード

方法 オンライン（ZOOMを使用）※詳細は申込者に直接連絡

参加費・問合せ先等

主催：北東北性教育研修セミナー実行委員会 **協賛**：日本性教育協会（JASE）

参加費：北東北（青森・秋田・岩手）からご参加、無料。北東北以外からのご参加、1000円（事前振込）

申込み：<https://tohoku-pride.peatix.com/>まで、名前、連絡先メールアドレス、所属（ある方）を明記の上。



▶▶ **3月25日（土）～26日（日）** ◀◀

GID（性同一性障害）学会 第24回研究大会・総会

ジェンダー治療開化宣言—広がる裾野、その先へ—

【主な演題】 具体的なテーマは、<http://gid24.umin.jp/program.html>

シンポジウム1「次の時代のGI(Gender Incongruence)医療に求められる精神科医」

シンポジウム2「健康保険適用後のGID診療の現状」

シンポジウム3「各地域・地方におけるGID診療の展開」

一般演題1「形成外科 乳房手術」 一般演題2「ホルモン・泌尿器科」 一般演題3「精神科・現状報告」

一般演題4「形成外科 その他」 一般演題5「当事者・法律・思想」 一般演題6「看護・教育」

一般演題7「社会学・調査」 一般演題8「その他」

【会場】

ふじさんホール・富士吉田市民会館

（〒403-0013 山梨県富士吉田市緑ヶ丘2-5-23）

【参加費等】

参加資格：本会への参加は、原則として会員および入会手続きを済ませた方。（非会員の方は、大会当日、入会が可能）

参加費：医師・看護職・心理士・教員等資格所有者・研究者 10,000円 一般 3,000円

【問合せ先】

主催：GID（性同一性障害）学会

大会事務局：山梨大学医学部附属病院 形成外科 〒409-3898 山梨県中央市下河東1110

大会会長：百澤 明（山梨大学医学部附属病院 形成外科 教授）

問合せ先：GID（性同一性障害）学会 第24回研究大会・総会運営事務局 ユアーズ学術企画株式会社内（担当：笹川／山本）

TEL：03-5937-1456／FAX：03-5937-1457 E-mail: gid24@yours-g.co.jp

包括的性教育 — ユネスコとの対話

セクシュアリティをハートで学ぶ

性教育の究極のゴールは世界中の
人が健康で幸せになること。

「自分の性」を自分のものにするために、

「みんなの性」をみんなで支えるために、

私たち一人ひとりにできることは何でしょうか。

学校が、コミュニティが、家庭ができることは何でしょうか。

「包括的なセクシュアリティ教育」を力強く推進する

ユネスコの性教育専門家 Jenelle Babb さんと

「人生をデザインするために性を学ぼう」と

訴えて活動する社会起業家の染矢 明日香さんの

講演をお届けします。

3/26 13:30-16:00

2023

SUN 開場 13:00

国立オリンピック記念青少年総合センター(小ホール)

無料 / 要申し込み(先着300名)

以下のリンク・QRコードより

事前にお申込みください。

<https://onl.bz/e8FLpKG>



お問合せ: cri.unesco@gmail.com (山崎綾音・坂内ひかり)

プログラム(予定):	13:00	開場	
	13:30	アイスブレイク「人と繋がる」幸せを取り戻す」	小貫 大輔
	14:00	「性を学ぶ、人生をデザインする」	染矢 明日香
	14:30	染矢さんとのQ&A	
	15:15	「今、ユネスコはなぜ性教育に本気なのか」	Babb, Jenelle
	16:00	BabbさんとのQ&A	
	16:30	閉会	

主催: ユネスココース(東海大学スチューデントアチーブメントセンター)
東海大学 国際学部・教養学部・児童教育学部

共催: CRI-Children's Resources International
かながわユネスコスクールネットワーク(KAN)
体験創庫かけはし

協力: NPO法人ビルコン

協賛: 日本性教育協会(JASE)

後援: ユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASPUnivNet)
公益財団法人ジョイセフ
一般社団法人日本家族計画協会

オンラインゲスト:

ユネスコの性教育専門家



Babb, Jenelle

ユネスコのアジア太平洋地域教育局(バンコク)を拠点に活動する健康とウェルビーイングのための教育に関する地域アドバイザー。ユネスコ本部(パリ)の健康教育課やカリブ地域をカバーするユネスコのクラスターオフィス、ジャマイカの教育省などで、15年以上にわたってHIV予防教育、包括的セクシュアリティ教育、学校保健、若者の健康とウェルビーイングの分野で活動してきた。地域アドバイザーとしては、アジア太平洋地域における健康とウェルビーイングのための教育に関するユネスコの活動を主導し、安全でインクルーシブ(包括的)な学習環境下での変革的な教育を通して、健康なライフスタイルとジェンダー平等の実現に貢献するために、各国の教育省とそのパートナーに政策や規範に関するガイダンス、技術や能力開発のサポートを提供している。

スピーカー:

NPO法人ビルコン理事長



染矢 明日香

自身の経験から日本の思いがけない妊娠・中絶の多さに問題意識を持ち、大学在学中より学生団体ビルコンを立ち上げ、性の健康の啓発活動を始め。2013年にNPO法人ビルコンを設立。自分事として性の健康を伝える若者ボランティアの育成をしながら、中学校、高校、大学等で300回以上、4万名以上の対象者に性教育講演を実施。思春期からの正しい性知識の向上と対等なパートナーシップの意識醸成に貢献している。

司会:

東海大学国際学部教授



小貫 大輔

東京大学とハワイ大学の大学院で性教育を学んだ後ブラジルに渡り、計12年間、エイズ予防、自然分娩・母乳育児の推進、子育て支援などのプロジェクトで活動。2006年に帰国して現職。帰国後は、日本に住む外国人の子どもたちの支援に携わり、多国籍の子どもを集める「マルチカルチャー・キャンプ」や「UNESCOユースセミナー」を主催するなどしてきた。日本性教育協会運営委員。

会場住所: 東京都渋谷区代々木神園町 3-1

アクセス: 小田急線

参宮橋駅下車 徒歩約7分

地下鉄千代田線

代々木公園駅下車 徒歩約10分

(代々木公園方面4番出口)

国際女性デー(3/8)

An International Women's Day

国際幸せデー(3/20)

International Day of Happiness

毎年3月8日は国連の定める「国際女性デー」。世界中の国で男女の平等や性と生殖の健康/幸せを考えるイベントが開かれています。そして3月20日は「国際幸せの日」。経済開発や社会・文化の活動を「人が自分らしく生きる幸せ」の視点から見直す機会となっています。

ジェンダーと
セクシュアリティを
理解する
ワークとダンスと
芸術表現の集い

第8回UNESCO ユースセミナー

UNESCO ユースセミナーは、多様な文化的背景を持つ若者たちの集いです。2015年から毎年、関東圏の公立・私立の学校、民族学校、インターナショナルスクールの若者たちを集めて開催されてきました。毎回、若者たちにとって重要なテーマの中から1つを選んで理解を深め、議論し、芸術的に表現する取り組みをしています。今年のテーマは「ジェンダーとセクシュアリティ」です。ユネスコが推進する「包括的セクシュアリティ教育」について一緒に学び、語り合しましょう。

3/27-28

2023

MON

TUE

国立オリンピック記念青少年総合センター

参加費: **5,000円** (食費・施設利用費・保険代を含む)

学校やユースグループ単位、個人で参加を受け付けています(先着100名)。
参加希望の方は以下のメールアドレスより事前にご連絡ください。

cri.unesco@gmail.com (山崎綾音・坂内ひかり)

プログラム【予定】:

Day1

9:00 受付開始
10:00 お互いを知るアイスブレイク
13:00 ジェンダーとセクシュアリティをめぐる世界の課題・日本の課題
15:00 体験型ワークショップ
19:30 グループごとのワーク

Day2

8:30 前日のふりかえり
9:00 ビオダンサー いのちの踊り
10:30 芸術表現のアクティビティ
13:30 グループごとのワークの発表
16:30 クロージング



主催: ユネスコユース (東海大学スチューデントアチーブメントセンター)
東海大学 国際学部・教養学部・児童教育学部
共催: CRI-Children's Resources International
かながわユネスコスクールネットワーク (KAN)
体験創庫かけはし
協力: NPO 法人ピルコン
協賛: 日本性教育協会 (JASE)

会場住所: 東京都渋谷区代々木神園町3-1

アクセス: 小田急線 参宮橋駅下車 徒歩約7分

地下鉄千代田線 代々木公園駅下車 (代々木公園方面 4番出口) 徒歩約10分



すぐ授業に使える

性教育実践資料集 中学校改訂版

〈主な内容〉

- 第1章 中学校における性教育（性教育を実践するにあたって／性教育の目的と意義）
- 第2章 性教育の実践（性教育の現状と実践の課題／学習指導要領における性教育の取り扱い／性教育の指導体制／指導計画の作成／性教育実施上の留意点／家庭・地域との連携／中学校の性教育の今後に向けて）
- 第3章 指導事例（各学年における指導計画と指導の流れ／8つの1年生の指導事例／6つの2年生の指導事例／6つの3年生の指導事例／7つの個別指導事例／5つの組織の指導事例）
- 第4章 参考資料（性行動経験率／性的なことへの関心割合／自慰経験率／性的関心の経験割合の推移／性へのイメージ／性感染症報告数の推移／梅毒患者報告数の推移／HIV・エイズ感染者の動向／人工妊娠中絶実施率及び推移／用語解説）

すぐ授業に使える

性教育 実践資料集

中学校改訂版



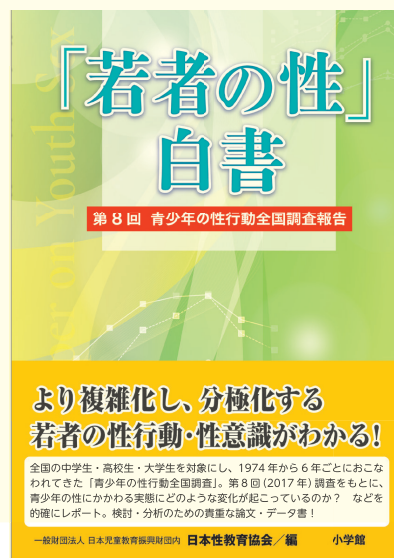
定価 2,200 円（税込） B5 判・224 ページ

「若者の性」白書

第8回 青少年の性行動全国調査報告

〈主な内容〉

- 序章 第8回「青少年の性行動全国調査」の概要
- 第1章 変化する性行動の発達プロセスと青少年層の分極化
- 第2章 青少年の性規範・性意識からみる分極化現象
- 第3章 家庭環境や親子のかかわりの違いは青少年の性行動に影響を与えるか
- 第4章 知識・態度・行動の観点からみた性教育の現状と今後の課題
- 第5章 青少年の性行動と所属集団の性行動規範
- 第6章 青少年の避妊行動の実態と包括的性教育の可能性
- 第7章 性的被害と親密性からの／への逃避
- 第8章 青少年の性についての悩み
～自由記述欄への回答からみえるもの～



定価 2,420 円（税込） A 5 判・256 ページ

編／一般財団法人日本児童教育振興財団内 日本性教育協会 発行／小学館

全国の書店にて、ご購入いただけます！